寝具	毛布			
	マット、マットレス			
	寝袋			
防寒用品	防寒具			
	使い捨てカイロ			
暑さ対策用品	冷却グッズ			
	蚊取り線香			
生活用品等	バスタオル			
	タオル			
	下着			
	トイレットペーパー			
	ウエットティシュ			
	オムツ			
	生理用品			
	仮設トイレ			
	猫砂（トイレ用）			
	消臭剤			
	マスク			
	水のいらないシャンプー（介護用品）			
	カミソリ			
	シェービングフォーム			
	歯磨きセット			

雑貨	ビニール袋、ポリ袋			
	ポリバケツ			
	雑巾			
	ガムテープ			
	掃除用具 （雑巾、水切りワイパー）			
現金				
その他				

7.8. 関連して活用する資料リスト・保管場所（別冊）

No.	資料名	主な内容	保管場所
1	利用者関連リスト	利用者（保護者）連絡方法	
2	災害時職員参集リスト	対策本部要員の参集と一般職員の安否確認用	
3	防災マニュアル	災害対応関連の基礎資料 （組織体制、対応方法など）	
4	消防計画	消防関連の基礎資料 （組織体制、対応方法など）	
5	協定書		

7.9. 取引先（事業所・者）リスト

No.	取引先名 （事業所・者）	連絡方法	住　所	備　考

7.10. 災害時対応業務チェックシート

※　施設の特性（地域特性・経営理念・利用者の医療ニーズ等）に合わせて変更して下さい。

時期	チェック	実施する業務
発災直後		火災対応 避難誘導 閉じ込め者の救出 施設利用者の安否確認、声かけ、不安解消 施設利用者の安否確認の報告、集約 館内放送により連絡、情報提供 応急救護 通信手段の確保 医療機関への連絡、搬送 施設・設備被害状況確認（応急点検）
発災当日		災害対策本部の設置 職員の安否確認 職員の安否確認の報告、集約 職員拠点確保 職員の招集、確保 短期入所、通所利用者の安否確認、声かけ、不安解消 短期入所、通所利用者の安否確認の報告、集約 利用者家族、行政、法人本部等への連絡 施設・設備被害状況確認（写真撮影、応急復旧） 自家発電、トイレ対策、防寒・避暑対策 食事の手配 一時入所及び利用者増員の対応 要援護者の受け入れ 地域ニーズへの対応 情報発信

翌日～ 3日後		職員の健康管理 ボランティアの受け入れ 問合せ対応 衛生管理 警備 業界団体・他施設等との協力
4日後～		職員の健康管理、ローテーション管理 情報システムの復旧 必要物資の調達、支援物資の受け入れ 被害箇所の復旧 行政、関係団体、法人本部などとの情報共有、調整

7.11. わが家の防災スタートブック

7.11.1. 持ち出し品

情報系グッズ			
	携帯電話	ネット接続/ワンセグ/FM	自治体災害情報に登録
	スマートフォン		ツイッター、フェイスブックも有効
	PC		
	乾電池式充電器	予備電池	
	手帳		
	筆記用具		
	家族情報シート		写真も必要

1次持ち出し品				
基本品目 33 点		大人 2 人分	チェック	最初の 1 日用
1	非常用持ち出し袋	1 個		取り出しやすい場所に置く。両手があくのでリュックが望ましい。非常用持ち出し袋の表示が恥ずかしい人は表示を工夫する。家族が多い場合はキャリーケース、スーツケースでもよい。
2	缶入り乾パン(飴など)	2 個		氷砂糖入り。乾パンが食べられない人は缶入りの柔らかいパン、カロリーメイト、ベビーラーメン、チョコ、飴でもよい。
3	ペットボトル飲料水 (500ml)	6 本		持ち運びやすいように一人 3 本とした。
4	懐中電灯	2 個		LED が望ましい。100 円ショップで入手可能。
5	ローソク等	2 本		LED が望ましい。100 円ショップで入手可能。
6	チャッカマン(ライター)	2 個		100 円ショップで入手可能。
7	携帯ラジオ	1 台		被災時の情報収集用。予備電池必要。
8	万能はさみ	1 セット		はさみ、ナイフ、缶切り、栓抜きなどの機能があるもの。あまり安いと使いにくい。
9	軍手、手袋	2 対		軍手は熱にも強い綿 100%で滑り止めのついたもの。皮手袋はガラスの破片の片づけなどに役立つ。
10	ロープ7m以上	1本		救助用。人の体重が支えられる強度のもの
11	救急袋	1 枚		12～20 をまとめて袋に入れる。袋には入れたものを表示する。
12	毛抜き	1本		ピンセット、とげ抜きの代用になる。
13	消毒薬	1 本		
14	脱脂綿	適宜		
15	ガーゼ(滅菌)	2 枚		
16	ばんそうこう	10 枚～		
17	包帯	2 巻		
18	三角巾	2 枚		大判の手ぬぐい、ハンカチでも可

19	マスク	4 枚以上		防寒用としても重要
20	常備薬、持病役など	適宜		処方箋のコピーもいれる
21	レジャーシート 2 畳	1 枚		避難先のスペース確保に。1 人 1 畳
22	サバイバルブランケット	2 枚		非常時の軽量防寒ブランケット
23	簡易トイレ	2 枚～		非常時におけるトイレ問題は深刻。猫砂とポリ袋でもよい
24	タオル	4 枚～		汚れのふきとり、ケガの手当て、下着の代用など用途は広い。汎用性が高いので多めに用意する。
25	ポリ袋	10 枚～		モノ入れ、雨具の代用、防寒、トイレ用など用途は広い。多めに用意する。
26	トイレットペーパー	2 ロール		トイレ、ティッシュの代用、汚れのふき取りなど。
27	ウェットティッシュ	2 個～		水がないときに役立つ。
28	歯ブラシ（洗口液）	2 個～		水がないときは空磨きでよい。洗口液で口の清潔を保つ。
29	現金（10 円玉）	約 50 枚		公衆電話用。100 円玉でもよい。
30	ガムテープ（布製）	1 個		伝言メモを貼るなど。
31	油性マジック（大）	1 本		伝言をかく、情報を伝える。
32	メモ帳とペンセット	1 セット		
33	使い捨てカイロ	4 個～		冬季だけでなく夜も使える。

1次持ち出し品　個別品目				
	必需品・貴重品	数量	チェック	
1	現金			
2	車や家の予備鍵			
3	予備メガネ、コンタクトレンズ			
4	預金通帳			コピーや番号の控えでも可。
5	健康保険証			コピーや番号の控えでも可、身分証明書になる。
6	運転免許証			
7	パスポート			
8	印鑑			
9	証書類			
	女性用品	数量	チェック	
1	生理用品			傷の手当て等ガーゼの代用になる。
2	ホイッスル付きライト			LED が望ましい。防犯用にもなる。
3	鏡			
4	ブラシ			
5	化粧品			
6	おりものシート			下着の代用になる。

高齢者用品		数量	チェック	
1	高齢者手帳			
2	おむつ			
3	着替え			
4	看護用品			
赤ちゃん用品		数量	チェック	
1	粉ミルク			
2	哺乳瓶			
3	離乳食			
4	スプーン			
5	洗浄綿			
6	バスタオル			
7	ガーゼ			
8	紙おむつ			
9	母子手帳			
10	玩具			
11	着替え			
12	ベビーカー			荷物運搬用にもなる。

2 次持ち出し品	安全を確保し落ち着いてから、自宅に戻って避難所や自宅外で必要となるもの。3 日分以上を用意する。		
飲　　料	数量	チェック	
飲料水			
非常用給水袋			ポリ袋を重ねて代用も可。
食　　料	数量	チェック	
アルファ米			
乾パン			
パン缶			
インスタントラーメン			
レトルト食品			
缶詰類			
切りもち			
スープ			
味噌汁			
ビスケット			
キャンディ			
チョコレート			
塩			

衣　　類	数量	チェック	
上着			
下着			
靴下			
生 活 用 品	数量	チェック	
タオル			
バスタオル			
毛布			
寝袋			
雨具			
予備電池			
卓上コンロ			
ガスボンベ			
固形燃料			
鍋			
ラップ			
アルミホイル			
やかん			
皿			
コップ			
割り箸			
スプーン			
フォーク			
歯ブラシ			
石鹸			
ドライシャンプー			
新聞紙			
安全ピン			

参考　　阪神・淡路大震災記念　人と防災未来センター「非常持ち出し品チェックリスト」

7.11.2. 重要情報

家族の必要情報					
1	全員の写真	各自の写真			
2	住所	地図	帰宅支援マップ		
3	名前	ニックネーム			
4	性別				
5	年齢				
6	誕生日				
7	血液型	Rh＋－			
8	所属	職場情報	学校情報	施設情報	
9	身長				
10	体重				
11	障がい名	薬名	主治医情報	補装具名	担当者名
12	病気名	薬名	主治医情報		
13	特別な配慮事項	アレルギー	副作用	吐きやすいなど	
14	病歴				
15	補装具	福祉器具			
連絡先					
1	家電番号	メールアドレス			
2	職場電話番号	メールアドレス			
3	携帯電話番号	メールアドレス			
4	親族名	住所	電話	メールアドレス	職場情報
5	友人名	住所	電話	メールアドレス	職場情報
6	保険証コピー				
7	医療証コピー				
8	母子手帳コピー				
9	避難場所	家の近く	職場の近く		
10	連絡方法	171	ケータイ171	遠い親族	遠い友人
11	市区町村役所				
12	警察署				
13	消防署				

7.11.3. 減災編

☆	建物の耐震化と命を守る工夫
	1981年6月に耐震基準が強化。それ以前の建物は耐震診断・補強工事が望ましい
	古い木造の建物は一階が潰れる危険性が高いので、できるだけ2階で過ごす
	緊急地震速報や初期微動があったら、念のために外に避難する
1	室内の安全化
	寝室や子供部屋にはできるだけ家具をおかないか、低い家具だけにして安全度を高める
	家具の倒れる方向には寝ないようにする
2	家具転倒防止
	突っ張り棒、L 字金具等は正しいつけ方をする。天井との隙間を段ボール等で埋めるのも有効
	高層の建物ほど揺れが大きくなる可能性が高いので、低い家具にするか作りつけがのぞましい。
	古い木造建物は揺れが大きくなる可能性が高いので、低い家具にするか作りつけがのぞましい。
	マンション等のキッチンは逃げ場が少ないので、転倒防止をしっかりおこなう
	最低でも家具の下に重いものをおき、手前に木片などをはさみ、壁に立てかける。壁から離すのも有効
3	落下防止
	家具等の上に重いもの、危険なものを置かない
	額や時計は要注意。掛けたい場合は壁にしっかり固定する。
4	ガラスの飛散防止
	窓ガラス、食器棚のガラス等には飛散防止フィルムを貼る
	できるだけカーテンをひいておく
5	テレビ、パソコン等の飛び出し防止
	耐震(粘着マット)を下に敷く
6	食器棚
	食器の下に滑り止めシートを敷く
	開き戸の場合はフックや扉開き防止ストッパーをつける
7	洗濯機、冷蔵庫
	壁に転倒防止ベルトをつけるか耐震マットを活用する
8	照明器具
	つり下げ式の照明器具は危険性が高い。使いたい場合はチェーンで補強する

7.11.4. その時編

1　地震発生！どうする！？	
絶対の正解はなく、その場で正しい判断ができるように訓練することが重要	
・室内では	机の下、安全な場所、身をかがめるなど←日ごろから家の中で安全な場所を確保し、確認する
・エレベーターでは	すべての階の停止ボタンを押す←普段から笛や LED ライト、ポリ袋をもっておく
・スーパー、コンビニなど	落下物から身を守るためカバンなどで頭を保護する。商品棚から離れ壁際に身をよせる
・道路上	落下物から身を守るためカバンなどで頭を保護する。空き地など安全そうな場所に移動する
・電車内	つり皮や手すりに両手でしっかりつかまる。乗務員の指示にしたがって冷静に行動する
・海岸	直ちに高台に避難する。警報・注意報が解除されるまで海岸に近付かない
・運転中	ハンドルをしっかり握り徐々にスピードを落とす。道路の左側に車を止めエンジンを切る。鍵はかけたままでドアロックをせず徒歩で避難する
注意 ： 以上は一般的なルールであるが、緊急時にはこれにとらわれず最適な判断を自ら行う。	
2　揺れがおさまったら、出火防止、出口確保、二次災害防止	
必ず大きな余震があるので、できるだけ安全な場所に移動する	
火が出たら落ち着いて消火する。小さい火は毛布をかけるなどで消す。ある程度大きくなったら消火器を使う。	
もっと火災が強くなったら、恐いのは火よりも煙。ハンカチを濡らし低い体制で避難する	
外出するときは、電気のブレーカーを落とし、ガスの元栓を止める	
ドアや窓をあけて脱出口を確保する	
3　家族の安全を確認し、隣近所の初期消火、救助活動	
災害用伝言ダイヤル、災害用伝言版、遠くの親族などを活用して家族の安否確認をする	
隣近所で協力して消火活動、救助活動を行う	
4　テレビ、ラジオ、ケータイ、公的機関などから信頼できる情報を収集する	
デマが必ず発生する。真偽を確認して行動する	
5　支援をする、必要な支援を求める	
自分より厳しい状況にある被災者を支援する（支援力）	
困っている状況、必要な物を信頼できる人、公的機関に伝える（受援力）	

7.12. 防災スターターキット

7.12.1. 福祉避難所スターターキット

7.12.2. BCP 関係文書例

本研修の内容に沿って作成する BCP 文書（基本文書）とあわせて、BCP に関係する様々な文書をあらかじめ作成しておくことで、より一層の対応力の向上が期待されます。ここでは、そのような文書類の例を示します。

＜関係文書の一覧＞

対策実施のために必要な文書を作成します。

・上位者および代行者　←施設職員組織図などから作成

・上位者の役割　←調査、検討して作成

・介護優先業務チェックリスト　←調査、検討して作成

・災害対応業務チェックリスト　←消防計画および調査、検討して作成

・夜間・休日対応　←消防計画および調査、検討して作成

・職員の災害時の行動基準書　←調査、検討して作成

・職員の緊急連絡網　←消防計画および調査、検討して作成

・職員の参集方法、参集見込数　←消防計画および調査、検討して作成

・バックアップ施設　←調査、検討して作成

・施設・設備担当事業者の連絡先　←担当者からの情報で作成

・施設・設備の点検手順書　←事業者と協力して作成

・関係団体との協定書　←関係団体と協議して作成

・災害時優先電話の確保、明示　←担当職員が作成

・ケアポイント票、プレトリアージタッグ　←ベテラン職員が中心になって作成

・看護職確保手順書　←調査、検討して作成

・医師確保手順書　←調査、検討して作成

・法人、医療機関、関係団体、自治会、行政、ボランティア連絡先、連携手順書　←調査、検討して作成

・転倒防止対策点検書　←調査、検討して作成

・非常用自家発電装置点検手順書　←点検事業者と連携して作成

・空調対策　←点検事業者と連携して作成

・上下水道確保対策　←調査、検討して作成

・ガス設備点検手順書　←点検事業者と連携して作成

・備蓄品リスト　←消防計画および調査、検討して作成

・献立表　←消防計画および調査、検討して作成

・重要文書リスト　←調査、検討して作成

・教育・訓練計画書、実施報告書　←消防計画および調査、検討して作成

別添2

平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金
（障害者対策総合研究事業）報告会

障害福祉施設における災害対応の実態と課題
ー東日本大震災の経験を踏まえてー

名城大学都市情報学部　柄谷友香
板橋区議会事務局　鍵屋　一

1

1．はじめにー障害福祉施設の防災計画上の課題ー

■障害者および福祉施設も甚大な被害を受けた
3県（死亡者数10人以上の27市町村）：障害者死亡率：2.06%（1,388人/67,509人）　ex：総人口に占める死亡率：1.03%（NHK調べ）
3県社会福祉施設875カ所（うち障害福祉施設268カ所）/7,206カ所が全壊・一部損壊（厚労省）

■「消防計画」＋「災害時に特化した対応業務」の追加に留まる
災害対応は施設ごとの消防計画の一部として強化．災害時に新たに発生する業務の追加に留まり，継続すべき通常業務は検討されていない．

■十分に生かされなかった国の障害者避難等のガイドライン
避難支援や避難所設置・運営などガイドラインが作成されたが，自治体職員の被災や膨大な業務対応で生かす余裕がなかった（行政福祉担当）

■知的・発達障害者の避難等の支援や事前計画は新たな課題
厚労省から3/16，23，29に「地震により被災した知的・発達障害児・者等への避難所等における支援について（その1～3）」が発出され，理解・対応のお願いがあった．対応への苦慮が表面化→「新たな課題」（本プロジェクト）

2

2．研究の目的

本研究では、東日本大震災の経験から教訓を紡ぐワークショップや施設への個別対応など一連の作業を通じて、将来同じような立場になり得る障害福祉施設（知的・発達障害）の防災計画・マニュアルの「具体性」，「十分性」，「仕組み」を充実させ、事業継続の視点を盛り込むことを目標に据えている

本発表では、災害対応現場の臨場感ある記録をテキスト化（読み物としての教材化）し、読むことによって、震災経験のない障害福祉施設長など幹部職員のイマジネーション力を向上させると共に、現行の防災計画における課題抽出と見直しを行った結果を報告する

3

3．エスノグラフィーの活用
ー過去の災害経験に学び，知恵や教訓を紡ぐー

- 災害対応＝初めて遭遇した状況下で最善を尽くすことが求められる／応用問題（正解のない問い）を解く問題解決能力

↓

- “次に何が起こるのか？”災害プロセスを理解する／災害の追体験

↓

- 災害を乗り越えてきた“過去の知恵”を共有化する
- 効果的な災害対応を行うためのノウハウを学ぶ

4

3．エスノグラフィーの活用
ー過去の災害経験に学び，知恵や教訓を紡ぐー

①災害現場に居合わせた人々自身の言葉を聞く

②思いもよらぬ災害に直面し、何に悩み、苦労し、どのように問題を解決していったのかを知る

③一連の災害対応プロセス・問題解決プロセスを明らかにする

④切り捨てられてきた暗黙知を掘り出し、集め、共有化する

4．障害福祉施設種別にみた災害対応の困難とその対応・対処（入所（2）、通所（3）、相談（2）　N=104）

カテゴリー	サブカテゴリー	記録単位数（件・%）					
		入所施設	（%）	通所施設	（%）	相談支援	（%）
受入れ体制	衣・食・住等の生活環境が未整備	12	36.4	6	12.2	0	0.0
	マンパワー不足	2	6.1	0	0.0	0	0.0
	スペース不足	1	3.0	0	0.0	1	4.5
	医療・保健的ケアの対応	2	6.1	1	2.0	1	4.5
	受入れ体制枠組みが未構築	2	6.1	1	2.0	0	0.0
	外部支援者の対応・活用	2	6.1	3	6.1	5	22.7
	避難所指定されていない	0	0.0	1	2.0	0	0.0
利用者サービス	ケアの質の低下	1	3.0	0	0.0	0	0.0
	清潔・衛生の維持	2	6.1	0	0.0	0	0.0
	日頃からの訓練	1	3.0	0	0.0	0	0.0
	利用者の心身・生活面への影響	2	6.1	0	0.0	0	0.0
	利用者とその家族の安否確認	3	9.1	3	6.1	0	0.0
	利用者の避難対応	0	0.0	3	6.1	3	13.6
	学校の理解と協力	0	0.0	3	6.1	1	4.5
	地域との連携	0	0.0	2	4.1	0	0.0
	行政との連携	0	0.0	2	4.1	1	4.5
	利用者の家族への引渡し	0	0.0	4	8.2	2	9.1
	施設間の連携	0	0.0	4	8.2	0	0.0
	一部サービスの事業継続	0	0.0	6	12.2	0	0.0
	利用者の作業不足	0	0.0	1	2.0	0	0.0
	利用者家族の協力	0	0.0	3	6.1	0	0.0
	避難者の訪問と相談支援	0	0.0	2	4.1	6	27.3
	保健師との連携	0	0.0	0	0.0	1	4.5
施設の安全性	ハード面の安全性	2	6.1	1	2.0	0	0.0
職員への配慮	職員家族の安否確認	1	3.0	2	4.1	1	4.5
	職員体制の見直し	0	0.0	1	2.0	0	0.0
	合計	33	100.0	49	100.0	22	100.0

別添2

Episode1
～災害を生き抜くための正解のない問い～

【入所施設】
衣・食・住等の生活環境が未整備

300名もの地域の人たちがどんどん上がってくるんです。水道も電気もガスも、ライフラインは全部ストップ。トイレも使えない。
自閉症の方は嫌なんですよね、自分のスペースの中に全然知らない人たちが入ってくるのは。

地域の避難者300人を受け入れる？

お陰様で建物残ったんですから、地域福祉の精神もあって、断ることはできません。

一晩目は卓上のカセットコンロに鍋を置きまして、備蓄の米をお粥にしたり。あと、指定避難所ではなかったんですが、地域の方が避難しているということで、物資が3日後から届き始めて、それを食べてしのぎました。

トイレは健康診断などで使うスクリーンで囲って、別の棟の物置にポータブルトイレを何カ所か置いて。利用者と避難者が同じ建物の中でトイレはしなくてもいい。ポータブルトイレの設置など、地域の方が結構応援してくれて助かりました。

おむつが足りない。その辺に垂れ流しみたいになる。その処理が大変でしたね。汚れたおむつが山のように積まれて、24時間風呂にたまっていた水を使って汚物の洗濯に追われました。

地域の方と利用者は居住空間を別にして。「ここからは利用者の居住空間なので絶対に入らないでください」ということをくれぐれもお願いしました。

7

Episode2

【入所施設】
受け入れ体制枠組みが未構築

指定避難所になっていなかったために、物資も情報も来なくて。
施設も大変だからと、行政が地域避難者に声を掛けてくれました。「地域指定の避難所が空いたので移りませんか」と。

地域の避難者をいつまで受け入れる？

行政から「避難所が空いたのでどうですか」と声がかかったんです。ところが、地域の避難者は「この避難所は大変だ、使い勝手が悪い」等、色々情報得られていて。やっぱり「ここがいい」と。食事は業者が出してくれるし、お風呂は使えるし、洗濯も支援物資でいただいた物が使えるし。出て行ってとも言えなくて、結局仮設住宅ができる7月まで避難されていました。

指定避難所でなければ、情報も物資も来ず。道路が通れるようになって、行政に指定をお願いしに行きました。

8

Episode3

【通所施設】
利用者の避難対応
学校・地域・行政との連携

宿泊機能がない中での利用者の避難対応に迫られました。やむを得ず、一般の避難所（学校・体育館）に重度の利用者と共に避難しました。

一般避難所でいつまで、どのように避難する？

体育館に行ってみたら、一般の人たちと一緒なんですね。無理にお願いして奥の部屋を借りて。重度の方は家に帰りたいとパニックじゃないけど落ち着かなくて。22時頃になってとても我慢できないということで、4～5人を職員3人つけて施設に戻しました。暗い部屋に閉じ込められて、精神のお薬も飲んでいなくて不安定で。精神薬は施設で預かっていたのですが、戻ったら真っ暗でどこにあるのか見つからなくて。通所のため、座布団位しかなくて、一睡もできず、結局、夜が明けると同時に全員で施設に戻りました。

高校に避難したら、学校と地域、行政が相談して、教室を割り当ててくれたんです。もともと施設や利用者に対する理解があって。学校で普段使っている石油ストーブと、水の入ったポリタンクを運んできてくれました。裏にある団地で炊き出ししてくれて、届いた50個のおにぎりを優先的に配布してくれたんです。翌日からは、別の山側の地区で米や野菜をかき集めて炊き出ししてくれて。食事は三度欠かさずいただきました。

9

Episode4

【通所施設】
一部サービスの事業継続

家族が安定しない所に子供を帰すと、子供自身もすごく不安定になる。

日中施設に通えないために、自宅でものすごい暴れたり、不安定になって。お家の方たちがもう耐えられない状況なので、とにかく預かって欲しい、通わせて欲しいという要望が多かったんです。

いつ事業を継続・再開する？

1時間でも2時間でも来るとやっぱり落ち着くので、施設は開けっ放しにしていました。いつも見ている顔が日中から一緒にいると夜も意外に落ち着いていました。同法人の職員や同業者の応援は、土日の対応やレクリエーションなど利用者への理解もあって助かった。その間にわれわれしかできない書類整理ができたり。

4月4日に事業を再開しました。その間も通ってもらって。ただ、集まっても何もすることがないっていうのがつらいんですよね。まずは地域の手伝いをしようと、スーパーに行って野菜の袋詰めから始めた。売り上げ云々でなくて、せっかく集まるんで震災を忘れる時間を作ろうということで。

利用者さんのお宅を訪問した際に、「とにかく急ぎ再開したいんだけど、土地がない」と話したら、「なあに、ここでいいんでねえのか」と言って。仮設の施設ができるまで、一時的にプレハブで事業を再開しました。ただ、作業がないので、草地だったところを鍬で起こして開墾、畑作りしたり。

10

Episode5

【相談支援業務】
利用者とその家族の安否確認

まずは、職員とその家族の安否確認を終えて。次に、車も事業所もない中、避難所を対策本部にして約400名の相談登録者の安否確認を始めなくてはと。

どうやって安否確認する？

車も全部流されたので、まずは歩ける範囲で避難所回りをしました。その中で、例えば、身障協会や親の会などネットワークでつながっている方たちの情報には助けられました。利用者やその家族がいろんなグループになんらかつながって情報交換しておられて、また、各種協会での安否確認が進んでいたので、情報共有しながら。3月中には90パーセントの安否確認ができました。こうしたつながりのない人の安否確認は本当に大変で。

11

Episode6

【相談支援業務】
避難者の訪問と相談支援

利用者は個性ある方々ですので、日が経つにつれて特異性が目立ってきて、避難所から「何とかして欲しい」という相談が増えてきて。

点在する仮設住宅に移り、震災前にあった地域コミュニティ（地縁）が壊れてしまって。今までになかったケースでこちらにつながる方が2割程増えていますね。

震災後の新たなニーズにどう対応する？

同法人の事業所にお願いして預かってもらったり。こういう非常時には、専門のいる障害者施設の避難所としての役割がかなり大きくなることを痛感しました。一般の避難所では、普段関わっていない人たちと一緒で、パニックになればビックリされる。障害者施設や協会などとつながりのない人たちは、行き場がなくて車の中でしばらく過ごされたりしました。

点在した仮設住宅に住むようになり、買い物とか通院とか今まで自力で行ってきた力がすごく弱くなりまして。震災後、買い物や通院の移動支援や、介護支援といった直接的に支援するケースが増えました。

仮設住宅から復興住宅への移動が始まって、希望した所に決まる方／決まらない方での温度差、新たな環境への適応で精神的に崩れる方も出てきています。定住先や周辺コミュニティが安定するまでとにかく一緒に寄り添わないといけません。

12

別添2

5.「障害福祉施設の事業継続を考えるWS」の開催

1日目（2013年1月13日）（6人×7班）
WS①:「過去の災害経験に学び，知恵や教訓を紡ぐ」
現場感を追体験し，災害イマジネーション力を高める
災害経験から知恵，教訓を紡ぐ
防災への心構え（必要性）と具体見直しにつなげる

2日目（2013年1月14日）（6人×7班）
WS②:「現行の防災計画（持参）の見直し」
施設の消防・防災計画を点検し，補正項目を検討する
事業継続を阻害する要因（ボトルネック）を検討する

6. ワークショップを通じて得られた主な知見
ーWS①：障害者福祉施設の災害経験を読み，知恵や教訓を紡ぐー

1	精神薬や特別食など利用者ごとの備えが必要	●精神薬は外部医療支援チームも持参しない ●通所ではお薬手帳を家庭で管理する場合が多く，朝夕の投薬管理が難しい．限られた非常食では，刻みや流動食，アレルギー対応が難しい ○医療福祉機関との事前の情報共有と連携が必要．
2	被災時の状況を判断しながらの避難対応	●災害時，利用者はすくむ，奇声を上げる，走り回るといった非日常行動をとる． ●入浴中や夜間など状況によってはなかば車に押し込むような強制的な避難しかない． ○障害者の特性をよく知って避難方法を検討すべき．一般避難者とは異なる避難所や部屋を分けるなどの工夫が必要（自閉症など発達障害） ○地域住民に障害者への理解を深めてもらう努力（精神・知的障害など）
3	利用者カルテなどの個人情報の管理	●母親名で施設保護者が登録されている場合，行政等の安否確認情報（世帯主名）とのマッチングが難しい ●利用者の高齢化により，一度失われた過去の記録や履歴を復元は困難． ○利用者カルテはPC管理や安全な場所でのバックアップが必要． ○行政や他機関との個人情報の共有化を前向きに検討すべき．
4	職員の肉体的・精神的な健康の維持	●利用者の家族も被災・高齢化し，引き渡すまで長期化する． ●利用者の非日常行動に不眠不休で対応せねばならない． ●職員同士や家族とも安否確認がとれない中での過酷な労働． ●職員が参集できず，業務ローテーションが組めない．
5	支援・受援計画の両方が必要	○ボランティア等の外部支援者に対する受援計画や体制を検討すべき． ○生命や健康に関わる食事介護などは担当職員，環境の清潔保持などは外部支援者など具体的に検討しておく．

14

6. ワークショップを通じて得られた主な知見
ーWS②：現行の消防・防災計画の見直しー

1	複数のシナリオや利用者の障害を考慮した避難策	○発災時の状況によって，複数の避難場所を想定しておく． ○自閉症など利用者の障害に応じた避難所の設定が必要．
2	福祉避難所（地域住民の受け入れ先）としての備え	○地域住民と連携して備蓄品を確保する． ○地域住民を受け入れた際に，利用者のサービス及び生活維持の優先順位を付けておく（入所型，通所型，グループホームなどで異なる対策をすべき）．
3	職員参集の規程と安全確保	○震度5以上で自主参集など具体的な規程を制定する． ○利用者対応時の職員の安全確保を検討する．
4	保護者と被災間，職員間の連絡体制の強化	○孤立する場合もあり，複数の連絡手段（衛星電話）や仕組み（個人情報の取り扱い，行政との連携）を設定しておく． ○災害用伝言ダイヤルや携帯の一斉送信などを保護者や職員全員が利用できるよう訓練する．
5	備蓄品目や保管場所の再検討	○時系列で必要な物資が変わっていく． ○ガソリン，発電機，衛星電話，反射式ストーブ，灯油，カセットコンロ，精神薬，非常食．利用者や職員のメンタル面を支えるDVDや音楽． ○備蓄品の保管場所の全員確認と優先度の高い持ち出し品の整理．
6	継続的な職員指導や訓練と計画の見直し	○職員全員参加で事業継続計画を策定していく． ○計画全体を把握するため，職員の役割を定期的に変更する． ○訓練を評価・見直しできる体制（責任者など）を置く． ○施設長や担当者の不在も考慮して，状況に応じた指揮命令系統を検討しておく．
7	社会福祉法人，医療機関，行政，地域等との連携強化	○近隣の医療福祉機関との協定や地域の防災組織との連携を強化する． ○大規模災害を想定して，内陸など遠方の機関や全国協会との協定を結ぶ． ○日常業務に理解のある社会福祉法人と支援・受援内容を協議しておく．

15

7. 障害福祉施設の災害対応力向上を目指して

1. 施設ごとに異なる防災計画の策定状況（レベル）や被災経験（現場イメージ）を共有し，実効性ある計画につなげる

2. 資源（ひと・もの・かね・情報）は日常から厳しい状況．時間帯により異なり，かつ，限られた資源の中で，優先すべき業務や工夫

3. 外部支援者受け入れ時の受援計画（利用者の生命や健康に関わらない業務など）

4. 通所や入所などのサービス形態，利用者の障害の種類や程度によって異なる対応・計画

5. 福祉避難所など避難者や地域住民を受け入れる立場の検討

6. トップダウン（法人経営者など）傾向が強い業界だが，状況に応じた指揮命令系統を検討するなど，職員全員が計画プロセスにかかわることが重要

16

調査協力へのお礼とお願い

- 本調査研究の遂行に際し、東日本大震災で被災された障害福祉施設、日本知的障害者福祉協会、各地手をつなぐ育成会、親の会など多くの皆様方のご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。
- 「障害福祉施設での災害対応や事業継続に関するヒアリング調査（東日本大震災に限らず）」を継続しています。ご協力いただける方を募集しております。

17

別添2

事業継続計画(BCP)研修企画とスターターキットを活用した初動訓練のご紹介

平成26年度厚生労働科研報告会
福島学院大学 宮代キャンパス本館4階 42番教室

平成27年2月15日(日)

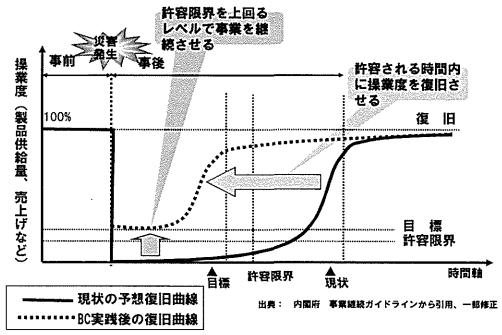
板橋区議会事務局・法政大学大学院　鍵屋　一
名城大学都市情報学部　柄谷友香

事業継続（ＢＣ）とは？

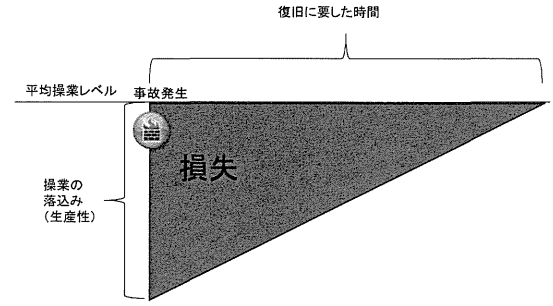
- 事業継続(Business Continuity)
  - 企業などが災害や事故などで被害を受けても
    - 重要業務を（なるべく）中断させず
    - 重要業務が中断した場合はできるだけ早急に復旧させること

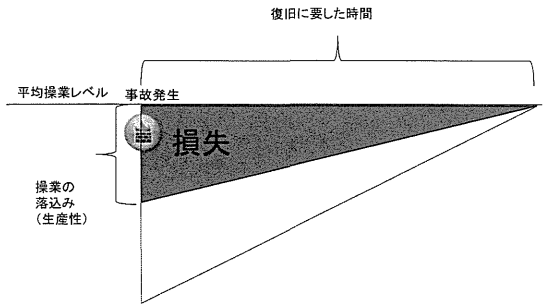
2　Copyright © 2007 BCAO

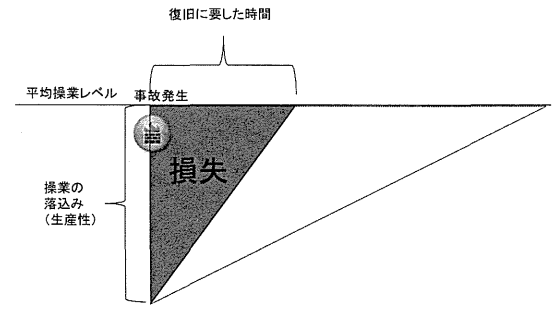
1-2 ＢＣの概念



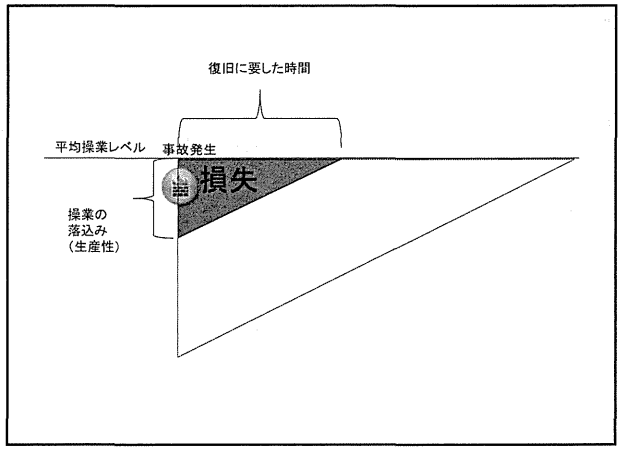
Copyright © 2007 BCAO　3

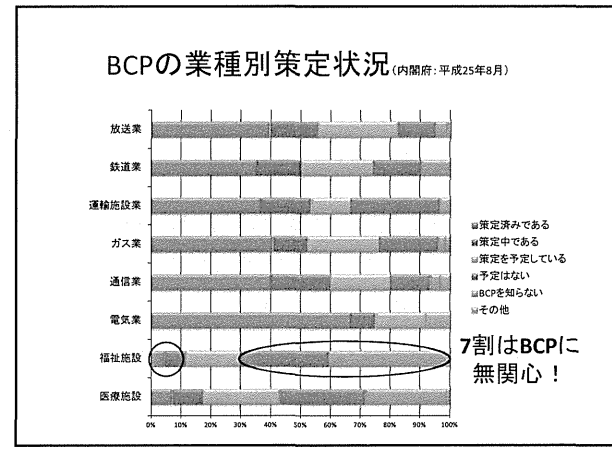






別添2





災害エスノグラフィ

■異文化を理解するための民俗学の手法

■数人で災害経験を話す

●災害時の生々しさ、臭い、風を感じる

●隠れやすい失敗、悪口、本音が出る

災害イメージづくりのプロセス

1. 災害に学ぶ（暗黙知）
   ⇒災害エスノグラフィ
2. ５以上の知恵、教訓の抽出（形式知）
3. ワールドカフェで話し合って、知恵、教訓を共有

ワールド・カフェとは・・・

会議室で日々繰り返される機能的な会議
よりも、
「カフェ」で行なうような、オープンで自由な会話
を通してこそ、
活き活きとした意見の交換や、新たな発想の誕生
が期待できる、という考え方に基づいた話し合いの手法

ワールド・カフェの
コンセプト説明

「ワールド・カフェ」の進め方

- カフェスタイルのテーブルに4人で座る
  ※４人は「聞く」「話す」のバランスが最も良い
- 20分～30分の会話を３ラウンド行い、各ラウンドでメンバーを入れ替える
- アイデアはポストイットに書き、テーブルの上に拡げてある模造紙に、貼り付けます

ワールド・カフェの
進め方